

薄暗い部屋の中、気が付けば私は異様な怪物に押し倒されていた。紫のラバー状の物質に覆われた、奇妙にエロティックな肉体が私に密着し生臭いゴムのような臭いに混じって、甘ったるい体臭が鼻をくすぐる。「彼女」は興奮した様子で、股間を私の性器にこすりつけてきた。股間にそびえ立つ、グロテスクな肉の凶器は私の下腹部に重くのしかかり何かの期待に震えるように、小刻みに痙攣しながら先走りの汁を垂らす。

「くひひっ……オンナあ……女の子のオマンコお……犯したいイ……ッ」
剥き出しの性欲を隠そうともせず、彼女は凶悪なペニスをガチガチに勃起させてはあはあと荒い息を吐きながら——その先端を、私の大事な場所に押し当てた。「うそ……や、やめてください……そんなの入らない……っ、いやあああつ!?」

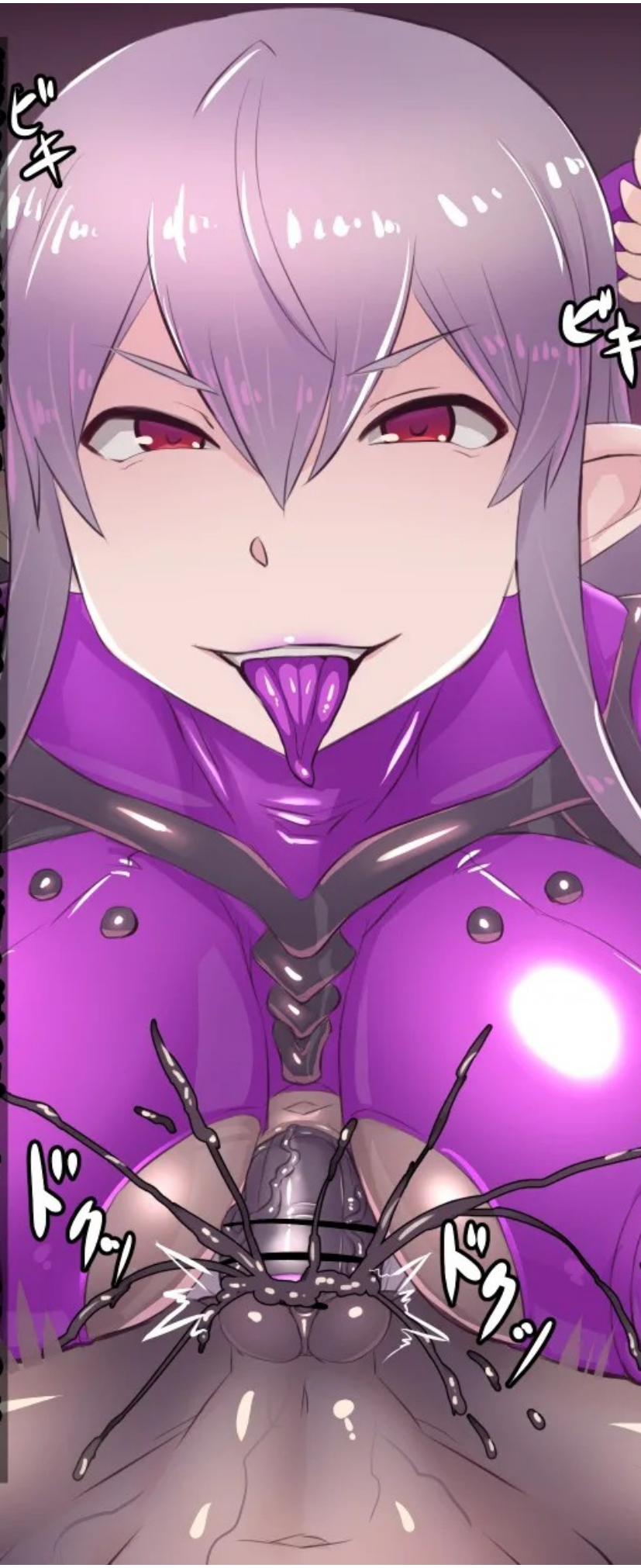
強引に肉を裂かれるひどい痛みにも、私は悲鳴をあげた
彼女が腰を打ち付けるたび、巨大な肉棒が私の内側をゴリゴリと削っていく
私はあまりの恐怖に全身をこわばらせ、震える声を押し殺しながら
少女の顔をしたバケモノが熱心に腰を振るのを、呆然と眺めるしかなかった
処女を奪われた——という事実さえ、しばらくは理解できなかったほどだ

「くひひッ……濡れてきたア……あたしのチンポ……気持ちいいんだア？」
どこか勝ち誇るように言い放ち、少女はさらに腰の動きを加速させてきた
気持ちいいはずなどない……膣内を感じるのは、激しい痛みと異物感だけだ
なのに……痛みがマヒしていくにつれて、結合部からは水音が響きはじめ
ぼんやりとした意識の中に、得体のしれない感覚が広がっていく……
「あはッ、いいぞッ……もつと気持ちよくシてやるッ……受け止めるオッ！」

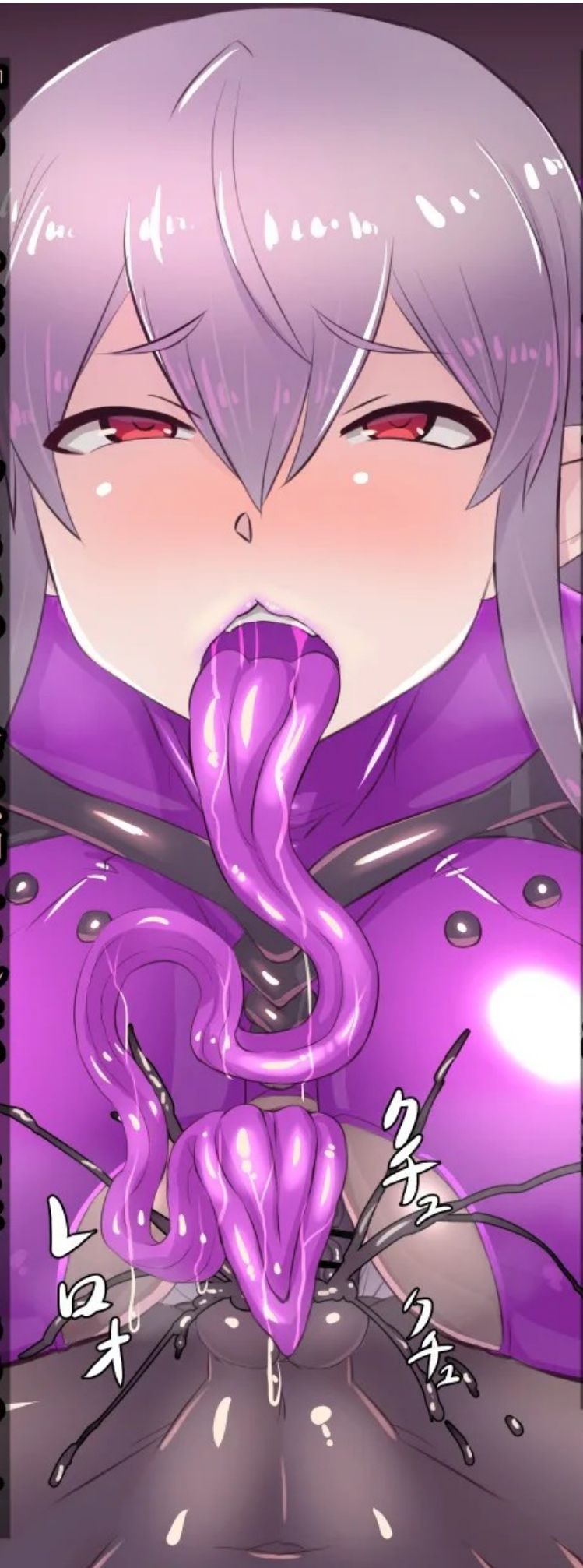
ジュッ
ジュッ

「おっほオオオおッ！ 出てるッ……チンポ汁射精してるッ！ おほオッ！」
熱い、ドロドロに溶けたゴムのような粘液が、勢いよく私の膣内に放たれた
私の内側を覆い尽くし、子宮全てを満たしてなお止まらず、膣口から迸る黒い体液
それは私の皮膚にぴったりと張り付き、未知の感触をもたらしてくる
「何なのこれ……身体が……お腹の中が……熱い……っ!?」

粘液は自らの意志を持つように広がり、全身の皮膚を覆い尽くそうとしていた
それどころか体内にまで侵蝕し、私の細胞全てを上書きしようとしてくる
自分が何か得体のしれないものに変えられていく恐怖に、背筋が凍る
だというのに、ゴム膜に覆われた身体は甘く痺れ、ひくひくと小刻みに痙攣して
まるで——自分が人間でなくなることを期待しているかのようなだった
「いいゾ……もつとだ……もつと素晴らしい身体にシてやる……ギヒヒヒッ！」



それから何十分か、何時間か……もしかしたらそれ以上か……
「彼女」は私の上で腰を振り続け、自らの体液を私の肉体に注ぎ続けた
もはや全身の皮膚はゴム質の被膜に覆われ……いや、「置き換えられた」
打ち付けられる腰の動きが、最初より格段にスムーズになってきたのも
私の下半身が、ゴムのように柔軟で弾力性のある「何か」に変わり果てたから
でもそんな肉体の変化より……何より恐ろしいのは「心」の変貌——



「あつ……やだつ……んうううつ……声つ、抑えられない……またイくううつ！」
恥ずかしげもなく淫らな嬌声を上げ、何百回目とも知れない絶頂を迎える
粘液に覆われた箇所は敏感になり、ただ触れただけでも強烈な快感を覚えてしまう
そんな体で味わうセックスの快楽に、私の脳は完全に蕩けきっていた

「くひひッ……この穴いいッ、完全にあたしのチンポにフィットする専用穴アッ
けど、まだ物足りないだろオ？ もっと最ツ高のボディに進化したいよなア！」
「そんなこと……ッ!? な、何……身体がッ……グッ……ひぎっぐぐううう!?」

理不尽なほどに甘い疼きが全身を駆け巡る

初めて女性を犯したいと思う

脳が灼ける

猛り狂った快樂神経が暴走する

私を構成する要素がドロドロに溶ける

性欲が膨れ上がる

ヒトを蹂躪し作り替えたいという異様な衝動に駆られる

ドク
ク
ニ

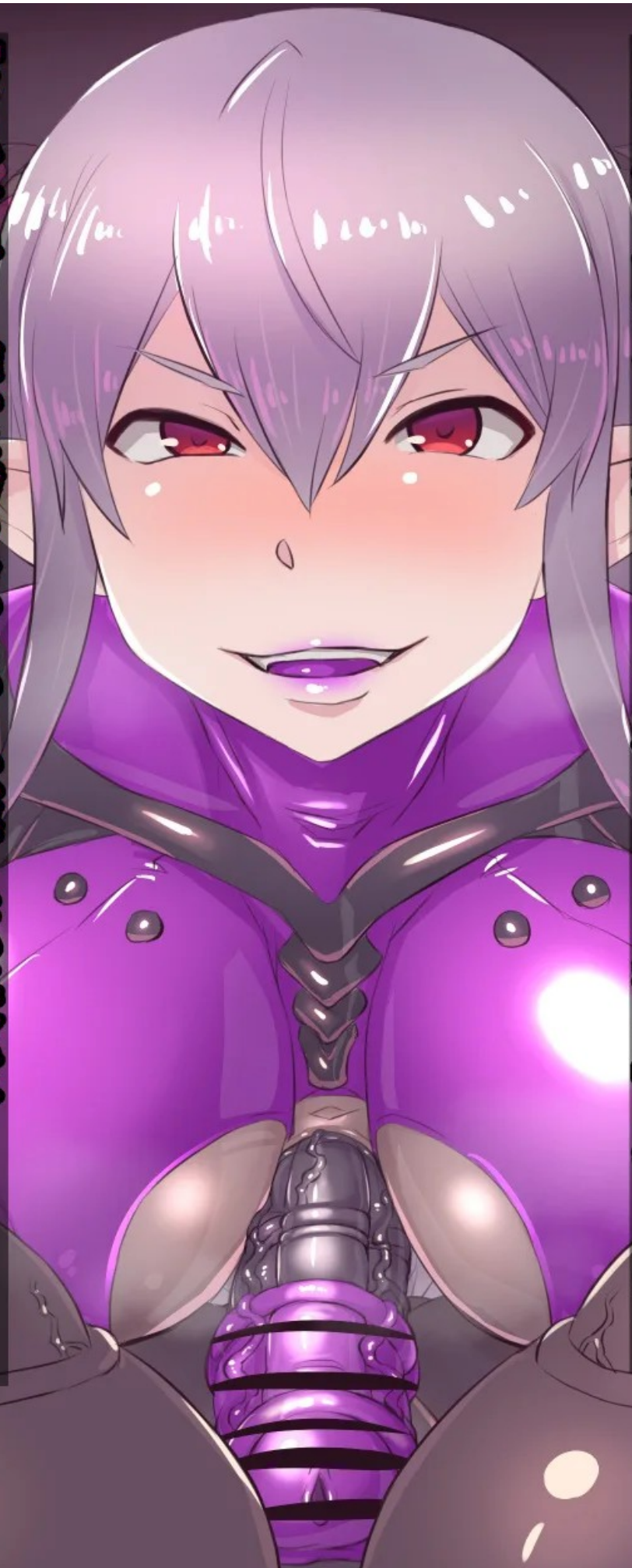
ドク
ク
ニ

ドク
ク
ニ



ああそうか——私はもう、「彼女」と同じモノなのだ

「くひひっ、気分はどうダ？」「自分のカラダを見てみる、興奮するだろオ？」
彼女の言葉に、私は改めて自身の肉体の変化を確認する
異様なサイズに成長した乳房……見るからに凶悪な形状をした手足……
昨日までの自分とはまるで違う、異形の肉体がそこにあつた
人々の目には異様な怪物として映るに違いない、変わり果てた姿
だが、既に人間をやめた私には、この肉体がとても「美しい」と感じられた



「そうですね……確かに誇らしいというか、悪くない気分です
ただ唯一の不満は、あなたみたいに凶悪なチンポが生えてないことですが」
女としては異常な感想を口にしてしまう私に、彼女はにやりと笑った
「クヒヒッ！ こいつが欲しいなら、もつとあたしとやりまくるかア!?
あたしの遺伝子を取り込めば、お前もすぐに最凶チンポ生やせるかもなア」
素晴らしい提案だ。私は即座に同意して、自分から股を開いた

「おおおおおおおオツ!? すごいぞこのマンコツ
あたしのチンポを全方向から刺激して……搾り取られるウ!」
「あはっ、まだまだですよ……もつとたっぷり遺伝子注入してください!」
私は長く伸びた舌同士を絡めつつ、催淫成分を含む母乳をまき散らした
甘い匂いのするフェロモンがむわりと立ち込め、互いの性欲を刺激する
膣内のペニスがびくりと脈動し、さらに激しくいきり立つのを感じた

——ああ、なんと歪んだ、美しい愛のカタチだろう

この素敵に狂った愛の営みを、私達だけで独占することこそ罪深い
一刻も早く人間達に私達の遺伝子を注ぎ込み、私達と同じモノに作り変えなければ
私達の手で人類を進化させ、この世界をめくるめく快樂の園へと変貌させよう
きつとそれが——「私達」がこの世界に生まれた意味なのだから



- 高画質版
- テキストなし版
- おまけ差分

pixiv fanboxにて公開中！